朝鮮通信使コーナー

海道をゆく

【問い合わせ】観光物産推進本部　☎0920(53)6111

朝鮮通信使の来日（9）

『第九回・享保四年（一七一九）通信使』

斎藤弘征

第八代将軍徳川吉宗

家宣の跡、七代将軍となったのは年齢僅か四歳の徳川家継でした。しかし、家継は八歳で病没、これを受けて八代将軍となったのは紀州藩徳川家の吉宗でした。「享保の改革」で後世高い評価を受ける将軍です。

吉宗は、享保二年五月「明後年の来聘」を対馬藩主義方に命じ、さらに来聘儀式の変更も命じました。それは新井白石によって改変された正徳の例（第八回）を廃して天和の旧例に復することでした。

大君外交の復活

この時期朝鮮においては、凶作と疫病で、国家財政は疲弊していました。このような情勢下、対馬に派遣された訳官との協議によって節目（実施要項）が成立しました。主な点は、「朝鮮国王よりの将軍宛名は、日本国大君殿下」と「道中の五所路宴」は廃止（これはかえって各藩の財政を圧迫することになりました）や、その他の礼式三〇項目について節目が決められました。

これら今回の来聘を、使行録の中でも最も知られている、制述官・申維翰の「海游録」に基づいてたどってみましょう。

絶好の航海日和

一行は六月二十日出航、夏の海は晴れて波もありませんでした。航海の様子を「海游録」は、「四望無涯、描く波紋は縮緬のようだ。…各自が碁（棋）を弾じ酒を酌み、穏やかにまどろみのんびりと歌いその盛大なること晴天を負うて逍遥する如くである」と、六船の（騎船三・卜船三）航海を延べています。

入港した佐須奈浦の絶景に感動し、鰐浦沖では海の難所を、「洋中に巨石が列をなして立ち、あるいは起き、あるいは伏し、さながら鯨の牙、虎の歯のようで、悚然（ぞっとして立ちすくむ）たるものがある」と眺望し、元禄十六年（一七〇三）にここで破船し、百十二名が遭難死した訳官船のことも述べています。

一行は夕刻豊浦に着きます。「ここは爽明たる風致」と、やはり景観を賞賛しています。使臣たちはここで上陸し、樹陰に憩い楽を奏で、錦衣を着た冠童に対舞させました。日頃接することのない異国の音楽・舞踊を見学しようと、近郷近在から小舟で見学に来る村人達もありました。

ついで西泊に停泊し、やはりその浦の美しさを爽然たる平湖、と述べています。西福寺に正徳信使の従事官李邦彦の、「翠竹蒼松蔭小庭」の句があり、また「豊崎郷西泊村富岳山西福寺」と刻した梵鐘があることも記しています。

一行は船頭港（小船越）にも停泊しました。ここでは、童子が裸で水中に潜り赤鱗魚と石決明（あわび）数枚を手づかみにして献じてくれた、と記しています。

二十七日、一行は府中に着きます。

芳洲との出会い

二十八日の夕刻、宿舎の西山寺に芳洲が訪ねて来ました。申維翰との初対面です。そのときの芳洲の印象を維翰は「頭には黒い三角冠を戴き、衣は両幅からなる斑衫（ひとえ）で、見たところ怪異であった、余は三書記とともに立って会い向かい、再揖（おじぎ）して座った。余はもともとその人が漢語に通じ、詩文を解し日東の翹楚（衆に抜きん出た人物）たるを聞いていた。…ときに年五十二。毛髪は半白であった」と、述べています。芳洲の名は夙に朝鮮にも伝わっていたのです。

芳洲と維翰の友情

府中の西山寺で初対面を果し、芳洲には芳しくない印象を持った維翰ですが、その後江戸往復の行をともにする旅の途次、いつしか二人には強い友情が生まれました。「雨森東（五郎）は狠人（心のねじれた人）である」と、辛辣に批難したこともある維翰ですが、「日本聞見雑録」では、「雨森はすなわち彼らの中では傑出した人物である。よく三国音（日本・朝鮮・中国語）に通じよく百家書を弁じ、その方訳（日本語訳）における異動、文字の難易を知っており、おのずから胸中に涇渭の分（清濁の分別）がある」と、芳洲の国際人としての存在を高く評価しています。何事にも妥協せず峻烈な評を下す維翰ですが、それだけに芳洲という人物が輝きます。

西の浜での別れ

信使一行は無事江戸での国書交換も終え、十二月二十一日府中に着きました。府中では江戸で潜商（密輸）が露見し、帰国してからの梟死（さらし首）を覚悟した訳官権與式が服毒死するいたましい事件も起きました。

そして二十八日、西浜に繋がれた使船を芳洲が挨拶に訪れました。維翰が「今夕有情来送我、此生無計更逢君」と、紙に書いて示しました。これを見て芳洲の頬に涙が流れました。そして「吾、今老いたり。あえて再び世間事にあずかることなく、朝に夕に島中の鬼（世を去る）になる日が迫る。なお何を望もうか。ただ願わくは、諸公は国に帰って朝廷に登り栄聞を休暢（出世）されんことを」、そう言い終って芳洲の頬にさらに激しい涙が流れました。

享保五年元旦、任務を終えた一行は府中の湾口を発船しました。せっかくの正月を迎えた護行の対馬藩士にとっては、ただただ気乗りしない発船となりました。

（さいとうひろゆき　対馬市文化財保護審議会委員）